

---

# 化け猫

ぼーず平野

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

化け猫

### 【コード】

N9975P

### 【作者名】

ぼーず平野

### 【あらすじ】

病気療養中の私に、妖魔の影が・・・。

表の格子を開け閉めする音がしたと思つたら、磨き込んだ梯子段を踏んで、千代が二階へあがって来た。彼女は落ち着いた藍ねず格子の紬に滅赤地の名古屋帯をお太鼓に結んで、食い込むような白足袋を穿いている。そうして私と目を合わす前にちよつとうなじへ手をやってから、静かに「信さん、お加減はいかが」と云いながら蒲団の裾へ座つた。大きな眸は、窓外に広がる晩秋の空気を映して蒼く、鼻の頭にはうつすらと汗を浮かべている。

「やあ、もう大抵は良いと思つんだがね」

私は蒲団に横たわつたままで返事をした。

「お医者様はなんと仰つて」

「はかばかしい験もないらしい」

あまり動くと背骨に響くので、私は小さく笑つた。千代は寒い訳でもないのに、膝のうえに重ねた手を摺り合わせるように動かして、部屋のおちこちを落ち着きなく見回した。

「なに、もう二三日もすれば起きられるのさ」

「ほんとうでしょうか」

「いつたい村松医学士は、患者を脅かしすぎるからいかんよ。こつ見えても、ずいぶん恢復が進んでるんだぜ。自分のからだのことだからね、やはり自分がいちばん良く判る」

私は千代の定まらない目を見ながらそう云つた。彼女はしばらく部屋中を見回していたが、やがて「でも信さん、ずいぶんと痩せて、なんだか別人のようですわ」と云つた。

「いつと比べて」

「いつだが、はつきりとは覚えませんけれど」

私は自分の胸板を片手で摩つてみた。なるほど患う以前に比べると肉が落ちて、酷く痩せたに違いない。指の先で触つていても、皮膚のすぐ向こう側の肋骨が一本ずつ明瞭に判別できる。つい半年前

までは武道で鍛えた肉が、堅く盛り上がっていたことから思うと、吾ながら改めてはつとする程である。

「ところがね、食い気は一人前にあるんだ。蒲団から出たら、飯も自然と咽を通るようになるだろう。飯を食ったら肉付きも戻ってくる。自明のことじゃないか」

「そうでしょうか」

「そうとも。今だって無性に牛鍋を食いたくて仕方がないんだ。もし村松さんがなんとか云わなきゃ、このまま起きあがって『いろは』に乗り込みたいくらいなものだ」

「まあ」

「呆れちゃいけない。すでにそれくらいな勢いがあるという例えだよ。それより千代さん、君、今日はずいぶんと疑り深いが、あまり神経を起こしちゃ毒になる。どうだい思い切って」

私はできるだけ軽い調子で云いかけた。

「いいえ、いけませんわ。ごめんなさい」と云いながら彼女は首を振り、鼻の頭をハンカチで押さえた。「今はなんでも悪いことばかりが真つ先に頭に浮かぶの」

「どうして」

「実はほんの三日ばかり前、うちで飼ってた猫が死んじまつて」

「猫ってあの猫かい。それほどの年寄りには見えなかったが」

去年の暮れ、用あって千代の家にあがったときに、白い猫を見かけた。ほんのわずかな時間であったが、そのとき猫は襖の陰から半身だけ出して、私のほうをじつと見ていた。

「年寄りなんかじゃないんです。縁側でいつものように昼寝をさせていて、ふと様子がおかしいと思ってから僅かのあいだのことなんです」

「そりゃ驚いたろう」

「なにしろ家族も同然に可愛がってたんですもの、なんだか頭の中に靄がかかっちゃまったようで」

そう云うと千代は、眉の根を寄せて唇を噛んだ。

x x x

夜半、深閑とした下宿屋のなか、何者かが梯子段をそろそろと昇つてくる気配で目が覚めた。階下に住んでいる家主は、老人であるからすでに寝入っているはずだ。この年寄りには耳が遠く、人が足音をたてて歩いたくらいでは気がつかない。

私は枕から頭を持ちあげて、暗い梯子段のほうを見た。障子に斜に差している更待月の青白い光は、窓の周囲にぼんやりとした明るみを投げているが、梯子段のあたりまでは届かない。暗がりのもやもやした中に、なにかがうずくまっているらしい。目をこらして見ようとしてもはつきりしないのに、視線をはずすと青黒い輪郭が浮き出るようであった。

そのうちに胸が押さえつけられるようで、息をするのが苦しくなってきた。晩秋だというのに、妙に生緩く重い空気が部屋のなかに沈んだ。

「だれ」

私は思い切つて、ほんの小さな声を出してみた。囁くようなつもりであった。しかし意外なことに、その声は私の頭のなかで渦を巻き、壁を越え屋根を突き抜けて、街道からはずれたこの寂しい家を取り巻く森を揺さぶるほど鳴り響き、その反響に私自身、思わず総毛立った。

「千代さんかい」

こんな夜中に千代が案内も請わずに入ってくるはずがない。家主でもなく千代でもないとしたら、あとは村松医師をおいてほかに私の下宿を知る者はいない。しかしいくら掛かりつけの村松さんとて、深夜の訪問は常軌を逸した行動である。日頃の彼を知る限りでは、あり得る話ではない。

案の定、うずくまっている影のようなものは返事もせず、しばらくじっとしていたが、やがて淀んだ生緩い空気とともに、潮が引い

ていくようにいなくなつた。そして入れ替わるように秋寒の夜気が降りてきたと思うまもなく、冷たい雨がはげしく軒を叩きはじめた。私は肩が冷えないように、蒲団を持ちあげた。

患つてふた月あまり、廁と湯を使うわずかな時間のほかに、この蒲団から出ることは稀である。賄いや郵便は階下の老婆が枕元まで運んでくる。朝餉のついでに婆さんは洗濯ものを引き取つていく。私は明けても暮れても、毎日、同じ天井の同じ木目ばかりを眺めて暮らしていた。

するとそのうちに、天井の木目がいろいろな模様に見えるはじめた。ある場所の木目は、猛り狂つた鬼の顔のようであり、別の木目は若くして肺病で死んでしまつた同級生の顔のようであつた。それぞれの木目は私に与えられた意味を持つてそれぞれに天井に張りついたまま、無言のうちにこつちを睨んでは毎晩のように私を苦しめた。そういう意味では、人の頭のなかで妖怪変化の類は優に存在し得ると私は考えている。しかし、今回のように何者かが梯子段を登つてきたのは、初めてである。

「あんまりお勉強ばかりなさるからですよ」

翌日、私の話を聞いて、家主の婆さんはそう云つて笑つた。

「この家に何か憑きものがあるのではないですか」

「そんなもの、おりません」

「しかし、僕はこういふことが初めてなのです。たしかにここへ引つ越してくるまでは経験がなかつた」

「それはあなたのようなお暮らしでは、ありもしないものがあるように見えるのも仕方ございませんでしょう。この家に憑きものなんかおりませんが、あなたが患つて怨霊かなにかを呼び込んだのかも知れません。化け物は弱つた人に寄つてくると云いますから。おお、嫌だ」

婆さんはそれだけ云つと、両方の肩を交互に手で払つて何かを落とすようにして、また梯子段を降りていった。

x x x

目を開くと大きな眸が顔を覗きこんでいた。

「大変うなされてらしたわ」と云って、千代はハンカチで私の額の汗を拭いた。その様子をぼんやりと感じ取りながら、私はやはりどこか千代に違和感のようなものを覚えた。

「夢を見ていたのだ」

「どんな」

「いつだか君の家に行ったときに、白猫がいたろう。つい先日死んだというやつだよ」

「ええ」

千代はちょっと戸惑ったように顔を曇らせた。

「あれが梯子段を登ってきて、その隅にうずくまってじっと僕を見てるのさ」

「まあ」

「気味が悪いじゃないか」

「そりやさぞかし。それからどうなすって」

「どうもしゃしないけど気味が悪いには違いない。しばらく僕を睨みつけて帰っていくんだ」

「どこへ」

「どこへかは知らない」

千代は無言でハンカチを何度もたたみ直した。額に汗を浮かべている様子を、私はじっと見ていた。

「そのハンカチで猫をじゃらしたのかい」

「ええ、よくお判りね」

窓枠が歪んで、雨上がりの秋空を支えきれなくなっているようであった。天井の鬼たちが何か勝手に囁きはじめた。肺病の同級生は、ぽっかりと空洞ばかりになった眼窩から、何か訴えたげに私を見下ろしていた。

「じゃらただけじゃないわ。死骸をこれで包んだの」

「なぜ」

「なぜって、後ろ足を縛って井戸につるしたからですわ。逆さにして一晩置いたら死んじまったので、包んで帰ったのよ」

「昼寝をさせてたってのは、嘘かい」

「毎日寝てばかりで、あんまりつまらないから苛めてみたんですの」  
千代の目がつり上がって、面白そうに笑った。

「猫をつるした井戸は、この下宿屋の井戸だね」

「ええ、そうですわ」

すると、いつのまにか部屋に上がってきていた婆さんが、「道理で芋の子に毛が生えてございましたわ」と枕元で云った。

「なるほど昨夜の賄いは里芋の煮付けかと思っていたが、そうするとあれは鼠の子だろう」

「へえ、そうでございます。井戸の水で何度洗っても毛が取れませぬので」

婆さんは恐縮して頭を下げた。

「よくもそんなものを食わしてくれたな」

「あなたはお勉強ばかりなさるから、ご自分が何を食べさせられたかもお気づきにならないのでございますよ。そもそもこの家がどうしてこのように街道から奥まった場所にあるか、ご本をお読みになつても書いてありますまい」

「どういうことだ」

すると婆さんを押しのけて千代が目を剥いた。

「今まで私たちがどれほど」

「まあまあ」と婆さんが千代を押しとどめた。「村松先生ももうお亡くなりですし、信様、あなたも今夜あたり食いごろでございます」

「そんなに猫が嫌いかね」

「そりゃもう」

千代と婆さんは互いに目を合わせて笑った。後ろにふさふさした尻尾が見えていた。

天井の鬼たちが一層やかましく騒ぎはじめた。肺病の同級生は真

っ黒な口を開けて、断末魔の声をあげた。

「それならば、食われる前に食ってやるっ」と云うが早いのか、私のからだは部屋いっぱい巨体化し、口は耳まで裂けて舌なめずりをした。

<了>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9975p/>

---

化け猫

2011年1月17日23時40分発行